社会紀行
オランダの女性と家族

大野節夫

I

オランダで生活していた二年間の最初のころ、目にはいるものはすべてがめずらしかった。色あせ、裂けたすそをつくろったあとの歴然とした服をまとって闊歩する若い女性の姿をみかけては、これもオランダ流のファッションの一つかと感心した。

オランダの女性は生き生きとしており、自由であり、そして男性はやさしい。私のアパートの内庭に面した窓から、向い側のアパートがよくみえる。妻にいわせれば、よく男性が台所に立っているとのこと。そういえば、近所の店でも男性が買物にくるのによくであった。もっとも、これは誇張でないにしても日本との比較からというべきで、オランダの女性にいわせれば、男性はあまり家事をせずに、多くは帰宅後、大工仕事に精をだし、テーブルも戸棚も、はてはヨットまで数カ月かかろうと自分でつくりあげる。残業などをきらってつくりだした自分の自由な時間を手作りの楽しみに惜しげもなく費やしているかにみえる。

II

この国でも家事・育児は女性の仕事。隣国のドイツでは伝統的なハウスフラウ（主婦）にたいし、男性が失業したとき、ハウスマン（主夫）になるのが増えてきているときいた。しかし、オランダではこの話はきいたことがない。

オランダの女性の立場を象徴的にしめしているのは、この国に保育所がないことである。社会福祉の諸施策、施設では世界で一、二を争うほど完備しているにもかかわらず、日本では福祉の一環である保育所が、ここでは皆無である。

保育所は一日働きつづけることと子供を育てることとを両立可能にする。だが、オランダでは両立させようとする人が数少ない。多くの女性は子供ができれば、仕事をやめ、育児・家事に専念する道を選ぶ。この状況では、子供を育てながら、働きつづけようとすれば、自分の親に保育を頼める幸運な人か、あるいは保育者を雇えるほどの高給をとる人にかぎられる。ここでは、小学生も昼には自宅で食事をし、ふたたび学校にもどるのが一

キウケンホフのチューリップと民族衣装の小女

般的だから、保育を心要とする期間は乳幼児の時期だけでなく、最低十年もつづくことになる。

この事情を教えてくれた、女性解放運動史を研究するIさんは、働きつづけることが女性にとってすべてではない、スタピッド・ジョブをしなければならないならば、自分も仕事をしないで、家庭にもどるとわりきった答をだしてくれた。

このような選択もさることながら、オランダの社会保障の高さは、夫婦があるいは子供をもつ男でも女でもなにがなんでも生活のために働かねばならない状況をなくしていることがあげられよう。学校をでて仕事をせずに、あるいはできずにいる成人にたいし、公的な生活保障が月に十二万円になる。この金額は離婚をしたり、夫と死別した母子家庭の場合、別離した夫からの養育費や保険金を考慮にいれずに十八万円ぐらいになる。最低賃金が二〇万円、六五歳以上の老夫婦がうける年金が月三〇万円になる、この国では、乳幼児をかかえながら働きつづけねばならない必要性をかなりうすれさせているといえよう。

さらに、スタピッド・ジョブの多くをこの国でも外国人労働者がうけおっている。五年間オランダで生活すれば国籍がとれ、したがって社会保障の恩恵がうけられることになっているから、他の西ヨーロッパ諸国と同じように、外国出身の労働者が多い。アムステルダムの小学生の半分は外国出身者の子供で占められているとみなしても誤りにならないだろう。生粋のオランダ人は郊外に住居をうつす傾向が顕著になっている。この傾向が、アムステルダム市の住民の四〇パーセントを最低収入（つまり、前出の社会保障の水準での収入）で生活する層にしている。

また、この国では中高年の再就職も基本的に制約がない。子供が乳幼児期をすぎた女性が幼稚園に再就職した話を身近かにきいた。さらに、多くの女性は子供が学校に行っている午前中だけでもパートタイマーとして各方面に復帰する。かつて小学校の教師をしていたある女性はパートタイマーとしてふたたび小学校にもどり、週三日特定の教科だけ教えている。注意を要するのは、この国ではパートタイマーもその時給についてはフルタイマーと同等である。

Ⅲ

このような状況で目立つことは、スペシャリストとして、専門職を求めて社会的に進出する女性が増加してきていることである。オランダの大学に在籍している学生総数十五万人中の三分の一が女性である。わが国にくらべて、大学への同世代での進学率は三分の一であり、しかも六年制であり、卒業がきわめて困難であることを考慮すれば、大学卒業者

は社会的エリート層をかたちづくっており、女性の比率は、わが国の二二パーセントにくらべてかなり高い。また、この大学に直結する中学・高校のコースに在学している女性は男性よりも多く、反対に初・中・高等職業学校では男性が女性よりも多い。

このなかで、いったん専門職を得た女性は仕事を手放すことをせず、子供をもとうとはしない。結婚もせずに独身でとおす女性もふえてきた。この傾向がオランダではかなり顕著になってきている。ここに、女性の自立の道をみいだしている女性も多い。公式の結婚をせずに、同棲生活を全うしようとする例もふえている。

実際、オランダでは子供の親からの自立が早い。高校生の年齢、十五、六歳で親から別居し、自活しはじめることが一般化しつつある。この自立生活は、たいてい適当なボーイフレンド、ガールフレンドとの共同生活のかたちをとる。私のアパートの掃除のアルバイトにきていた十八歳の女子高校生も典型的にこのコースを歩み、親から四万円、奨学金三万円、アルバイト三万円で生活している。彼女がボーイフレンドとけんか別れをしたとき、まわりの大人は、あの男の子は彼女にとってよくないから別れた方がいいというだけであった。もっとも中学校に入ったばかりの娘をもつ親は、自分の娘がいつ別居を要求するかにセンセンキョウキョウしていたが。

この早くからの、最低限度の生活費での自立が、最初に書いたファッションの秘密であることを理解したのは滞在生活もかなりたってからであった。

前出のIさんは、自分の親の時代には結婚をし子供をつくるのがふつうであったが、このような傾向が最近のものと説明する。オランダでの女性問題は、母親問題に限定されずに広くとらえられるようになってきているというべきであろうか。女性問題に関する本が本屋の片隅にあるだけでなく、その専門店も存在している小国である。

Ⅳ

さまざまな社会保障が完備されているこの国では、以前、主婦がになってきた、またになわされてきた役割が公的に代替されてきている。身体が不自由になりつつある一人住いの老人のところにはホームヘルパーが週一、二度援護する。足が不自由になった七十歳の老人が六十歳のホームヘルパーの運転で週一回友人のところにトランプをしにいくことを楽しみにしているという話もきいた。重度の心身障害児は生れたときから施設で保護され父母が会いにいく。また、親に虐待されていると訴える子供に、国は子供をその親から隔離し、保護する制度と施設をつくっている。みずからは虐待したとおもっていない親の前

子供と母親と先生と、小学校の玄関で

から突然子供が姿をけし、係員が子供の持ち物をひきとりにくるが、親の弁明、釈明を聞く機会はない。

社会保障、福祉の発展のなかで、子供と離れて一人で暮している老人たちのなかには、一日中窓辺にすわり、ただ外を眺めるだけの生活をしている姿も多く、また自分の息子や娘の自慢を常日頃しているにもかかわらず、当の息子娘が老父母のところにはよりつかない例ももれ聞く。別居している老父母が病気になっても、子供たちが世話をしなければならない日本とはちがって、このオランダで登場してくるのはまず同じアパートに住む人たちであり、公的な機関である。

オランダのある新聞が日本の女性の現状について特集記事を掲載したとき、これは本当か、とても信じられないと質問されたことがある。オランダ語で書かれたその記事を辞書をひきひき読んだかぎりでは、日本では女性が男性に依存し、こびて、家庭でも社会でも生活しているというものであった。日本の女性にくらべれば、オランダの女性ははるかに解放的である。

（大学経済学部教授）

『同志社百年史』について

「通史編」（全二巻）

同志社百年の歴史を五つに時代区分し、次の五部から成っている。

第一部　創業と成育（明治前半期）
第二部　キリスト教教育の受難（明治後半期）
第三部　大学への道（大正期）
第四部　戦時下の学府（昭和前半期）
第五部　再生と発展（昭和後半期）

上野直蔵総長は「通史編」の「序」で、「同志社における徳育の基礎であるキリスト教は、それがキリスト教たるがゆえに、少なくとも一九四五年にいたるまで国粋的権威筋から胡乱な目でみられ、疑問視され、敵視されてきた。（中略）同志社を護るための先人たちのすさまじいまでの攻防は、まさに一つのドラマであり、読むものをして緊張と畏怖の念を起こさせるであろう。この書は同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分をも隠すことなく記している。」と述べておられる。ラットランドのグレイス教会における新島襄の、学校設立に関する訴えを起点とする「通史編」は、確かに、キリスト教主義をめぐる同志社の攻防を軸に展開されているといえよう。もちろん同志社の諸制度や諸学校の変遷、そこで生きた学生生徒を含む諸先輩の動向などは、それぞれ独自に、読者に訴えるものをもつはずである。

「資料編」（全二巻）

「通史編」の叙述に用いられた基礎資料およびそれに関連のあるものを中心に編纂されている。同志社開業関係にはじまり一九七五年度までの主要な資料を収録、原資料による同志社百年史といってよく、それ自体自立性をもっている。収録資料三五〇点、従来活字になっていなかったもの、すなわち未公開資料が数多く含まれており、読者は同志社史の新しい一面を見出すであろう。研究者の期待にも応えうるものである。詳しい同志社年表を添えてある。

「通史編」約一七〇〇ページ。
掲載写真　三二五点。
頒価・六、〇〇〇円
送料不要の場合　五、四〇〇円
「資料編」約二〇〇〇ページ。
頒価・一二、〇〇〇円
送料不用の場合　一〇、八〇〇円
発行・学校法人同志社
取扱い・同志社収益事業課
（☎〇七五―二五一―三〇三八）